

都立の 逆襲

2003年甲子園初出場の伝統校
投打のポテンシャルは都立屈指

雪谷

大竹泰成主将



雪谷は2003年に東東京大会を制して甲子園出場を果たした栄光がある。選手たちが力のすべてを発揮したとき22年ぶりの聖地が見えてくる

昨夏は二松学舎大附に善戦

今年は潜在能力がありながらも秋・春は悔しい結果となった。昨夏の東東京大会では2回戦で二松学舎大附に惜敗したもの、2年生エース熊田航大が延長10回4失点と力投。エース熊田がそのまま残った新チームの期待は高かった。しかし、チームとして苦しんだ。秋都大会は1回戦で日大二に快勝したが2回戦で昭和に敗れた。雪辱を期す春都大会は1回戦で明大中野に2対10の7回コールド負け

となった。熊田は「昨夏の実感が取り戻せず自分のピッチングができなかった」と秋春の敗戦を受け止めた。

春は大型サウスポーがデビュー

春都大会の明大中野戦は、先発・熊田が序盤に降板し、身長184センチの左腕・吉田健心がマウンドに登った。昨秋以降に投手転向の大型サウスポーは、安定したフォームから威力あるボールを投げ込んでいった。しかし、昨春都大会準優勝の明大中野打線を抑えることができなかつ



今年の雪谷は、松岡、熊田、早瀬、亀田、吉田の5人の投手陣で勝負する。投打の歯車が噛み合えば2度目の甲子園も夢ではない

た。吉田は試合後のベンチで「チームの力になれなかった」と涙をぬぐった。それは本気の証だった。夏を控えたチームは、熊田、吉田の両腕がさらに力を伸ばし、亀田修一、早瀬文音、松岡史穂の安定感も増す。最速140キロの2年生右腕・松岡は「3年生のためにも勝利につながるピッチングをみせたい」と出番を待つ。

周知結集、赤い旋風再び

今季のスローガンは「雑草軍団～赤い旋風再び～」。雪谷の旗のもとに集まった野球小僧たちが、元プロ選手・伊達昌司監督のもと切磋琢磨して成長を遂げている。小原陽、加藤聖季、大竹泰成主将

の野手陣は1年生からベンチ入り。主砲・新井柊登は昨夏も4番を任された。「この3年生は入学当時から意識が高く、甲子園に行くために自分たちで考えて行動できる世代だった」(伊達監督)。雪谷の練習は、選手主体。プロを経験した都立指揮官は、選手を型にはめることなく、じっと成長を見守ってきた。春以降は新1年生も加入し、学年の枠を越えて競争は激化。グラウンドには情熱がみなぎり、活気であふれる。大竹主将は「1日1日を大切にしてい戦必勝で戦っていく」と完全燃焼を誓う。赤き雑草軍団は、自分たちの力を信じて夏のフィールドに立つ。

